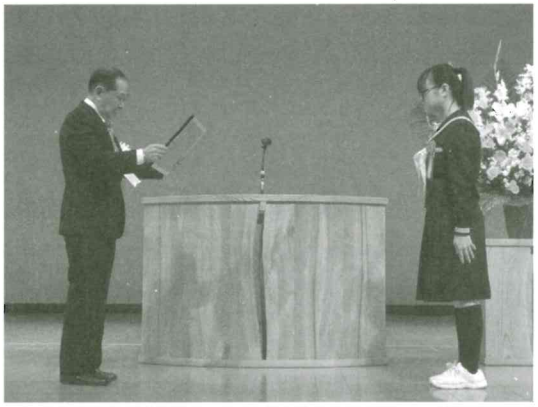
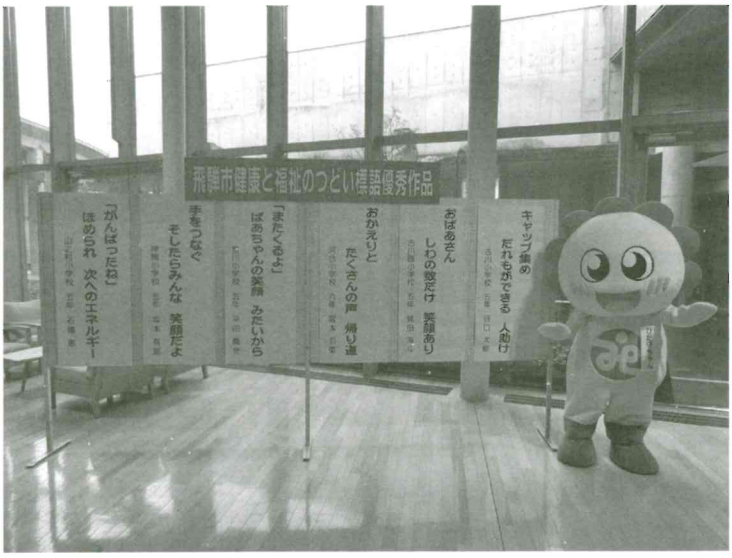
飛騨市社会福祉協議会

福祉協力校だより

平成25年12月18日発行





福祉標語優秀作品

発行／社会福祉法人飛騨市社会福祉協議会　〒509－4221　飛騨市古川町若宮2丁目1番66号　古川町総合会館内　TEL0577－73－3214

平成25年度
福祉意見発表 応募優秀作品

11月10日(日)、飛騨市文化交流センターで、飛騨市と共催で「飛騨市健康と福祉のつどい」を開催しました。これは、国民健康保険健康世帯の表彰や市内中学生の意見発表・市内小学生の福祉標語の掲示を通して、住民が健康の喜びと、地域福祉の重要性について、関心を深めることを目的として実施しています。

本年は飛騨市・飛騨市社会福祉協議会合併10周年という節目の年になり、オープニングセレモニーとして増島保育園の園児の皆さんによる和太鼓を披露していただきました。

中学生の意見発表では、飛騨市の将来を担う若者の学校や家庭、将来についての考えに、来場者の皆さんは真剣に耳を傾けていました。

自分にできること

古川中学校三年
小谷奈歩

私たちの身のまわりにはさまざまなボランティア活動があります。その中でも私が特に印象に残っているのは、古川中学校で毎年行っている「暑中見舞い・年賀状」のボランティアです。これは、生徒会福祉委員会が中心となって、市内の独居老人に対して、私たち中学生が葉書を送るという活動です。

私は一年生の時に、初めて福祉委員会の「暑中見舞い・年賀状」のボランティアに参加しました。その時は自分からではなく、どちらかといえば無理やりという感じで参加していました。だから、葉書の内容も気持ちがこもっていませんでした。ある日、ポストの中に私あての葉書が入っていました。見てみるとそれは、私が以前葉書を送った方からの返事の葉書でした。それには「素敵な葉書をありがとう。」と書かれていました。私が何も考えずに書いた葉書がこんなにも喜ばれていることに、うれしい気持ちと、もう少しちゃんと書いていればよかったという後悔の気持ちでいっぱいになりました。

それから私はこのボランティアに毎回参加しています。それは、以前ちゃんと書かずに出してしまった後悔の気持ちと、自分の出した葉書で喜んでくれる人がいるという、うれしさがあるからです。

私はこのことに気づいてから、ボランティア活動のすばらしさを改めて感じるようになりました。

この葉書のボランティア活動の他、古川中学校ではさまざまな活動に参加しています。

ペットボトルのキャップ集めでは、私たちの身近にあるペットボトルのキャップを集めるだけで、病気で苦しむ人にワクチンを接種することができ、たくさんの人々の命を救うことにつながります。また、祭りの清掃活動では、ポイ捨てしてあるゴミを拾うことによって、町がキレイになり、たくさんの人が気持ちよく祭りを楽しむことができます。

また、ボランティアは学校だけではなく地域にもたくさんあり、私たちはいろいろなところで役に立つことができます。

しかし、実際のところボランティア活動に参加する人は少しずつ少なくなっています。その理由の多くが「ボランティアだから参加しても何ももらえない」というのや、「めんどくさい」ということが多いです。たしかに、ボランティアは仕事とは違いお金や物がもらえるということはないので、やりたいと思えないのかもしれません。しかし、ボランティアは物ではありませんが得るものがあります。それは「ありがとう」という言葉や、たくさんの笑顔です。自分がしたことを喜んでもらえるのはとても幸せなことだと私は思います。「ありがとう」と言ってもらえたり、たくさんの笑顔が見れれば何も得られないとは言えないと思います。だからボランティアは、人のためにやるというより、自分のためにやっていると言えるのかもしれません。

そのようなことをふまえて私は、これからも学校でのボランティア活動に積極的に参加したり、ボランティアだけじゃなくて、自分がされてうれしいと思うことを、これから進んで取り組んでいきたいと思います。

思いやりの輪

古川中学校三年
杜下　凌

この春、僕の通う古川中学校では、生徒会宣言をつくりました。その時、古川中学校をさらによくするためにアンケートをとりました。その結果、学校を楽しくないと思っている人が7％もいることを僕は初めて知りました。

僕はそれまで、古川中学校はいじめが無く、みんな平等に触れ合える学校だ、と思っていました。

実際に周りでも、そんないじめや陰湿な嫌がらせは見なかったし、どの人も楽しく生活しているように感じていました。

その時、自分は部活と勉強のことだけで精一杯で、周りに気を配る余裕がなかったからだと思います。

しかし、このことがあってから、あらためて周りを見て気付くことがありました。それは、友達とじゃれているように見えても、明らかに嫌そうな表情で話している人、はたから見ると楽しそうに遊んでいるようでも、口に出すことのできない苦しさや悩みを抱えている人がいることです。

僕はこの状況を知って、クラスの中だけでなく全校にも気持ちを伝えれず苦しんでいる人がいるはずだと思い、古川中学校をあたたかい学校にするために福祉委員長に立候補することを決めました。

全校へのアンケートの結果から、学校内で「学校が楽しい」と答えている人が93％と分かりました。でも、この学校が楽しくないと思う人が約35人もいることはとても悲しいことだと感じました。

そこで前期福祉委員会では「笑顔を増やそうキャンペーン」を行い、学校を楽しいと思える人を増やすことに取り組もうと思いました。

このキャンペーンはその名の通り、学校内の笑顔を増やし、いじめのない学校をつくることを目的としています。手順は、

1．全校にアンケートを配り、言われてうれしい言葉、嫌な言葉を調査する

2．アンケートで出た、言われてうれしい言葉を学校で使うことができるよう呼びかけ、一日の終わりに何人ができたか聞きとる

3．毎日の結果を掲示して、全校に達成度を知らせる

このキャンペーンを行う上で、福祉委員の人に呼びかけたのは「一人一人が学級のことを思ってクラスに呼びかける」ということです。福祉委員会は学級に二人しかいないので、一人一人が真剣にやらないと全校として成長できないと思いました。もちろん委員長である自分が先頭に立って呼びかけたりしないといけないので、「キャンペーンに協力お願いします」「言われてうれしい言葉を進んで言えるようにしましょう」と呼びかけをしたり、委員会で話し合いました。

キャンペーンを始めた初日、「言われてうれしい言葉ってどういう言葉か分からない」という意見が出ました。確かに考えてみると、そんなに毎日言われているわけではないと思います。

そこで、「言われてうれしい言葉」だけではなくても「ありがとう」や「がんばれ」など生活の中で当たり前の言葉を呼びかけ、差別なく声をかけられるような学校を目指し、取り組んでいくことにしました。

すると、体育の時間などにはげましの声が増え、普段の生活の中でも「ありがとう」などの言葉が多くなりました。クラスとしてそういう言葉が増えたのはとても良いことだと思いました。

もちろん、これだけで古中の仲間関係が変わると思っているわけではありません。これからも仲間関係改善を目指し、一人一人が住みよい学校づくりに向けて取り組んでいく努力が必要だと思います。

自分がそうだったように、自分のことだけでなく、「他人の心を考えること」、「他人がどうしてほしいか考えること」が本当に大切なことだと思います。僕は、これからも、仲間を大切にし、話したことのない人にも話すことで全校に少しでも思いやりの輪を広げていきたいと思います。

つながる

神岡中学校三年
加藤侑奈

みなさんは、今まで生きてきた中で、大きな荷物を持って、歩いていたお年寄りを見たことがありますか…？これから、私自身夏休みにすれ違った、２人の方の話をします。

私は、夏休み、二人のおばあちゃんと道ですれちがいました。そして、私は今、あの日のことを後悔しています…。

それは、夏休みに入って、私が体育祭の練習で学校に向かっている頃の話です。学校へ足を運んでいる途中、私は道で一人の知らないおばあちゃんとすれちがいました。そのおばあちゃんは、すごく重たそうな荷物を両手に一つずつ持っていました。すごく手伝いたかったけど、（手伝ったら練習に遅れてしまう）という思いが、私を邪魔しました。そして、私は最終的に「手伝わない」という選択をしました。おばあちゃんを見て見ぬふりをしてしまいました。別に知らないおばあちゃんだけど、私の大切で大好きな神岡町に住んでいる方です。だから、手伝ってあげられなくて悔しかったです。

それから、何日か経ったある日、今度は違うおばあちゃんとすれちがいました。その方もまた、私の知らないおばちゃんです。そして、この前見たおばあちゃんと同じ現状でした。そのおばちゃんは、何度もバックの持ち方を変えていて、本当に重いっていうのを見てて感じました。それなのに私は、また、何て声をかければいいのかとか、おばあちゃんの家が遠かったらどうしようとか考えていて、手伝うことができませんでした。

私の学校の校長先生がいつも言ってみえることがあります。それは、『つながる』ことです。私は、最初この言葉を聞いたとき、正直意味が分からなかったけど、今回出会った二人のおばあちゃんのおかげで少し分かった気がします。その、『つながる』は、学校だけでは駄目だと私は思います。神岡町全体がつながって、家族みたいになりたいな、とこのことを通して感じました。

中学校で一回、震災のことについて学んだときに、関東大震災を経験した方が言ってみえた言葉がすごく印象に残っています。それは、「日頃の地域の協力とかが、災害にあったとき、助け合わなければならないときに、つながってくる。」ということです。だからこそ、私は、家族になる神岡が助け合っていけばいいと思いました。それが、「家族」という形になると思います。今、こんなこと言っている私だけど、自分は、あのおばあちゃん２人を助けられませんでした。もう、おばあちゃんたちに会わないかもしれないけど、今度、困っている人がいたら、助けたいです。

私が、助けられなかったことを、お母さんに話したら、「そういうのは、時間に遅れてもいいから手伝うことが大事なんやよ。」って言っていました。このことを言われて、気付きました。

私は、困っている人がいて、「自分が～だから」と言って見てみぬふりしていたことが、とても情けなく感じました。だから、これからは、「自分が～だから」という考えを捨てて、周りを見ていきたいと思います。

私は、手伝えなかったことを、今でも後悔しているけど、逆に今自分に足りない部分を見つめなおすことができたと思います。夏休み、あのおばあちゃん二人に会うことができて、自分を見つめなおすことができて、本当に良かったです。これから、こういうことは、何回か起きると思います。けど、今持っている気持ちを忘れずに前に進んでいきたいです。

平和を願う小さな思いやりから

山之村中学校二年
石橋穂

「思いやりの気持ちと優しい心が平和につながる。」

これは、広島に落とされた原子爆弾で被爆された瀬木正孝さんが語って下さった中の言葉です。僕たちは、九月十一日から三日間、平和学習のため、広島へ修学旅行に行きました。そこ

で、語り部の瀬木さんの話から戦争の恐ろしさ、そして平和の大切さを知ることができました。

二日目には広島平和記念資料館と、平和記念公園を胎内被爆者である石原智子さんが案内してくださいました。最後に慰霊碑の前でお祈りをしようとした時、石原さんは、「戦争をなくすなんて大きなことじゃなくてもいいから、自分の身近なことを祈ってくれたらいいんだよ。」と話されました。

僕はこの二日間の平和学習で、疑問に思うことがありました。瀬木さんは戦争による人々の苦しみやつらさ、何より原子爆弾の驚異を実際に体験して知ってみえるはずです。石原さんも、幼い頃にはつらい時があったはずです。それなのに、なんで戦争と原爆をこの世界からなくしたいということではなく「身近」な「思いやり」のことを僕たちに伝えたのでしょうか。僕はそのことが、ずっと気になり考えていました。僕は、毎年地元神岡で行われている給食ボランティアに参加しています。会場について一番最初に驚いたのは、そこに集まっていた人の数の多さです。たくさんの人がお年寄りの方のことを気づかっているのだと実感できました。ただお弁当を作るわけではありませんでした。少しでも喜んでもらえるよう、お年寄りの方が好きそうな煮物やひとりでは作らないであろうハンバーグなどを作りました。また旬の食材を使った料理も作りました。健康の事も配慮し、薄めの味つけも意識して作っていきました。このようにしてでき上がったお弁当を持ち、バスで、地元の村の伊西という集落にすんでいる方に届けにいきました。その方は、暑い中バス停で僕たちが到着するのを待ってみえました。お弁当を渡した時に「ありがとう。」とうれしそうな笑顔を見せてくださいました。その時僕は、ただお弁当を届けただけではなくお弁当とともに作った方々の思いやりの心も一緒に届けたことに気付いたのです。僕は、給食ボランティアに参加してよかったと心の底から思いました。

地域の中でも思いやりを感じることがありました。僕の家族は、山之村に引っ越しをしてから丁度十年目になります。この十年間、僕たちは山之村に住む人々の優しさに支えられてきたといっても、過言ではありません。今僕が住んでいる家も、地域の方がすすめてくれた家です。また、忙しくてどうしても両親が幼い兄弟の世話ができなかった時、地域の方が代わりにめんどうを見てくれたこともありました。見返りを求めるわけではなく、ただ僕たち家族のことを思って、数えだしたら切りがないほど多くのことをしてもらいました。その一回一回が、心に響き、申しわけないと思いながらも、本当にありがたいと感じました。思いやりの心を受けとると、心があたたかくなり、とても嬉しいということがよく分かりました。

僕はこの二つの体験から、思いやりの心を持って相手に接するということは、お互いに心があたたまり嬉しくなり、そうなることでよい関係を築き上げることができるのだと思いました。また、この思いやりの心を家庭の中で持ちそれを地域に広げる、そして地域から国に、そして国から世界に少しずつ広めていくことで国同士お互いによい関係を築き上げていくことができるはずです。その関係を築き上げることができれば、国同士のあらそいがなくなります。あらそいがなくなることで戦争は起きなくなり、戦争が起きなければ核兵器を作る必要がなくなります。これこそが瀬木さんと、石原さんの目指している平和なのではないかと思います。

僕の学校では、仲間のかがやきとあったかい言葉を見つけ、全校に伝える取りくみがあります。僕はそこで、思いやりの姿を見つけどんどん発信していくことで、世界が平和になるように、今の自分にできることから始めていきます。

福祉協力校とは？

飛騨市社会福祉協議会では、次世代の担い手である小学校・中学校・高等学校の児童・生徒がボランティア活動や、身近かな福祉活動の中で、社会奉仕や社会連帯の精神を養い、家庭や地域の福祉の心を深めるような教育の実践を行うこと目的として、福祉協力校の指定をしています。当協議会では、福祉協力校へ助成金を交付し、活動の支援を行うと共に下記のような活動を連携を取りながら実施しています。

具体的な活動は？

1 広報・啓発活動

- ❖ 講演会や展示会等の開催
- ❖ 各学校の福祉活動の紹介
- ❖ 体験作文、学校新聞等の作成や配布
- ❖ 福祉意見発表
- ❖福祉標語の募集

2 調査・研究活動

- ❖ 地域における福祉実態調査

3 体験学習を目的とした実践活動

- ❖ 社会福祉体験活動
  （手話、点字、車いす体験など）

4 地域一般での訪問・交流体験活動

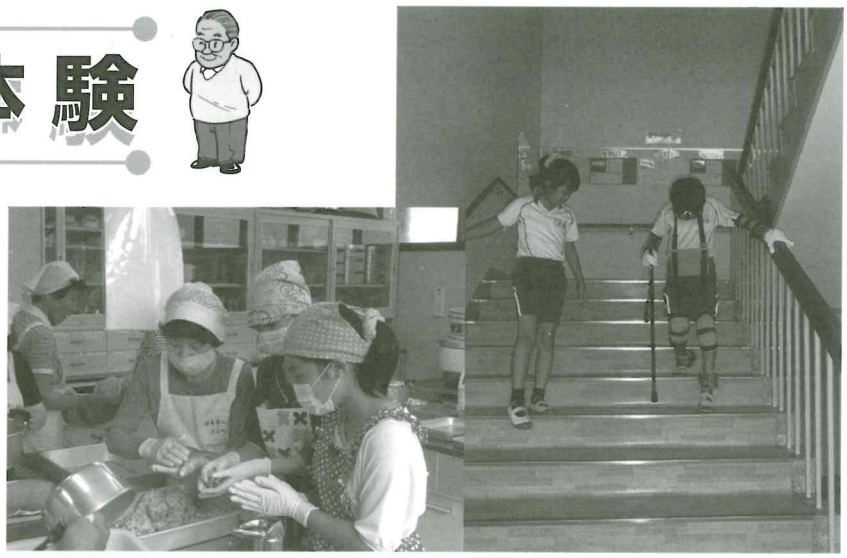
- ❖ 高齢者施設等への訪問、交流活動
- ❖暑中見舞い、年賀状等の送付
- ❖ 給食サービスボランティア活動
- ❖各種募金活動
- ❖ ベルマーク・エコキャップ収集活動

【福祉協力校一覧】

飛騨市立山之村小中学校・飛騨市立古川小学校・飛騨市立古川西小学校
飛騨市立河合小学校・飛騨市立宮川小学校・飛騨市立神岡小学校
飛騨市立古川中学校・飛騨市立神岡中学校
岐阜県立吉城高等学校・岐阜県立飛騨神岡高等学校

福祉体験

活動の一環として、夏休みに、一人暮らし高齢者、高齢者世帯への給食サービス体験や福祉学習の中で、車いす体験、高齢者疑似体験などを行っています。



福祉標語優秀作品

キャップ集め
だれもができる　人助け
古川小学校　五年　谷口大修

おばあさん
しわの数だけ　笑顔あり
古川西小学校　五年　見田海斗

おかえりと
たくさんの声　帰り道
河合小学校　六年　宮本羽菜

「またくるよ」
ばあちゃんの笑顔　みたいから
宮川小学校　五年　平田龍世

手をつなぐ
そしたらみんな　笑顔だよ
神岡小学校　五年　坂本有那

「がんばったね」
ほめられ　次へのエネルギー
山之村小学校　五年　石橋　恵

出前講座

車いす体験や高齢者疑似体験、障がい者に関する疑似体験、福祉学習に必要なものを貸し出したり、職員が出向いてアドバイスします。事業やクラブ活動、先生や企業、地域での学習会等、お気軽にご相談ください。

高齢者疑似体験

高齢者疑似体験セットを身に付け、年齢を重ねると体の状態がどう変わるのかを体験することができます。高齢者の気持ちを考え、介助者の役割を学びます。

車いす体験

車いすの種類や機能、操作の仕方をご説明します。また、車いすに乗っている人、車いすを押す人双方の気持ちを理解し、相手を思いやり生活する大切さ、介助方法を学びます。

視覚及び聴覚障がい体験

特殊眼鏡や耳栓をつけることで、障がいのある方の生活での不便さを発見し、障がいの理解促進を目指します。

＊この他にもさまざまな出前講座を準備しております。
詳細につきましてはお問い合わせください。

お問い合わせ　飛騨市社会福祉協議会　TEL 0577-73-3214